

中学生・高校生・大学生における 秘密の保持

——発達的な観点から——

茨木 友子・橋本 宰

問 題

何でも話す人は正直者なのではなく悪人である。イギリスでは、いかなる人間関係であっても、秘密を漏洩するべきではないというルールが重要であると考えられており、このルールが守れず、何でも話してしまう人は悪人と見なされてしまう (Brislin & Pederson, 1976)。日本人を対象として行われた Morsbach (1977) の研究では、一般的に、日本人には悩みを話したり、あらゆる感情を表出したりするべきではないとするルールが人間関係において存在することを見出している。その人間関係がたとえ親密な関係であっても、同様のルールが存在することも報告している。更に、感情を露わにしたり、個人的な問題を打ち明けたり、助言を求めたりということはするべきではないという考えが、低い年齢の人々よりも高い年齢の人々において強い傾向があると示す研究もある (Argyle, Henderson, & Furnham, 1985)。秘密は個人内において守るべきルールであり、そのルールを破ることにより人間関係は混乱し (Goffman, 1966)、悪化する (Argyle, Furnham, & Graham, 1981)。

このような「秘密を保持する」ことを Margolis (1974) は、故意に情報を他者から隠すことであると定義している。しかしながら他者に対して故意に隠される情報を一般化することはできない。つまり、保持される秘密の内容は人によって異なり、他者にとっては秘密に値しないような内容であっても本人にと

っては秘密となることを示し、あくまでも秘密は個人が他者に対して意識的に隠す情報であると言える。

それでも人は、特にネガティブ情動を感じた経験を抑制する傾向があると言われている (DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein, 1996 ; Gross, 1998)。秘密はしばしば個人にとって最も辛い経験であったり (Larson & Chastain, 1990)、罪悪感、恥、あるいは嫌悪を感じている出来事 (Finkenauer & Rime, 1998 a) であるなど、個人にとってネガティブあるいは汚辱である情報が含まれている傾向があると報告されている (Norton, Feldman, & Tafoya, 1974)。また、Finkenauer & Rime (1998 b) の研究においては、報告された秘密のうち、25% が秘密保持者によりポジティブな評価を得ており、個人にとってネガティブな内容だけが秘密となるわけではないことが明らかにされている。他にも、個人のアイデンティティに関するような秘密、例えばゲイであることのような秘密が存在することも報告されている (Cole, Kemeny, Taylor, & Visscher, 1996)。

このように、秘密には様々な内容のものが存在すると指摘されている中で、欧米における多くの秘密に関する研究は、一貫して性的な秘密が最も多く報告されることを示している (e.g., Hill, Thompson, Cogar, & Denman, 1993 ; Kelly, 1998 ; Kelly, Klusas, von Weiss, & Kenny, 2001)。例えば Kelly et al. (2001) の研究では 85 名の大学生を対象として、誰にも話していない最も個人的で私的な秘密を筆記するように求めている。その結果、最も頻繁に見られた秘密がレイプされた経験、お金のための性的交渉などの性的な秘密であり、85 名中 28 名がそのような秘密を報告していた。欧米においては性的な秘密が最も多く報告されるが、日本でも同様の結果が得られるのだろうか。

日本では、秘密に関する研究は現在までほとんど行われていないが、大学生を対象としたネガティブな秘密の保持に関する研究がある (茨木・余語, 2002)。この研究では、201 名の大学生を被調査者として、人に言えずに悩んだり苦しんだりしている事柄の有無について尋ねており、そのような秘密を保持していると回答した被調査者には筆記可能な範囲でその内容を記述させてい

る。その結果、97名が上述のようなネガティブな秘密を保持していると報告し、最も多く報告された秘密は現在の自分の性格についてであり、全体の17.5%であった。欧米の多くの秘密に関する研究で最も頻繁に見られる性的な秘密は、この調査では全体の2.1%しか見られなかった。但し、この研究では恋愛に関する秘密が全体の15.5%と、現在の自分の性格に関する秘密の次に多く見られたことから、性的な秘密は恋愛の秘密として筆記された可能性が否めない。また、この研究はネガティブな秘密のみに焦点を当てたものであるため、秘密を特定せずに、その内容を調査する必要性が考えられる。

では、なぜ人は秘密を保持してしまうのか。なぜ、秘密を他者に打ち明けることができないのだろうか。秘密の内容と同様に、秘密を他者に打ち明けることができない理由も多種多様であり一般化することは困難である。それでも、頻繁に報告される理由が存在する。Baxter & Wilmot (1985) および茨木・余語 (2002) の研究では、秘密を打ち明けることで人間関係に亀裂が生じる恐れがあるという理由が最も多く示されている。また、秘密を打ち明けることで聞き手の気分を害する可能性があるから (Pennebaker, 1993; Pennebaker, Barger, & Tiebout, 1989)、秘密を打ち明けることで、聞き手がその秘密に対して示す当惑など、聞き手から非好意的あるいは非援助的な反応が示されると予想するから (Lehman, Wortman, & Williams, 1987; Pennebaker, 1993; Pennebaker et al., 1989; Wortman & Lehman, 1985)、秘密を打ち明けることが恥ずかしい (Hill et al., 1993) などの理由も多く報告されている。

上述のように、人は様々な理由により様々な内容の秘密を持つ。それにも関わらず「秘密を保持する」というとネガティブなイメージを抱いてしまう傾向が一般的にみられる。しかしながら、発達的な観点では、秘密を保持することは個人が健康的に成長している証拠であると考えられている (e.g., Hoyt, 1978; Szajnberg, 1988)。例えば Szajnberg (1988) は、自身の研究を通して、頭の中で思ったり考えたりしても、決して口にはしてはいけないような社会のタブーを学び、そのような情報を個人の内に秘めることは、個人が健康的に発達

することの大切な要素であると指摘している。他にも、3歳児は秘密を保持することはできなかったが、5歳児になると秘密を保持することができるようになることを証明している研究もある（e.g., Peskin, 1992）。

しかし、これまでの多くの秘密に関する研究は、主に大学生を対象として行われており（e.g., 茨木・余語, 2002；茨木・余語・橋本, 2004；Kelly, 2001）、他の年代を対象とした研究は筆者らの知る限りわが国では皆無である。このことから、本研究では、中学生、高校生、大学生を対象として秘密を保持すること自体に発達的な変化が見られるのか、更に性別による差異も見られるのかどうかを検討することを目的とした。また、異なる学校段階において、どのような理由でもってどのような事柄が秘密とされやすいのかも検討した。

方 法

被調査者 京都府下の私立で同じ学校法人に属する中学校、高等学校、大学を対象として、中学生 102 名、高校生 186 名、大学生 354 名、計 642 名が本調査に参加した。しかし、4 名の中学生、6 名の高校生および 11 名の大学生の調査票において回答に不備が見られたため、これらの被調査者は分析から除かれた。従って、分析に用いた被調査者は 12 歳から 15 歳（平均年齢 13.60 歳、 $SD = .96$ 歳）の中学生 98 名（男子 36 名、女子 62 名）、16 歳から 19 歳（平均年齢 17.30 歳、 $SD = .75$ 歳）の高校生 180 名（男子 71 名、女子 109 名）、18 歳から 26 歳（平均年齢 19.55 歳、 $SD = 1.31$ 歳）の大学生 343 名（男性 146 名、女性 197 名）、計 621 名であった。

調査票 **秘密の有無** 他者に打ち明けていない事柄の有無を尋ねた。その事柄は他者に一度も打ち明けたことがないもの、あるいは部分的には打ち明けてはいるが、その核心に関する内容や感情については打ち明けていないものとした。

次に、秘密があると回答した被調査者には、さらにその事柄について尋ねた。まず被調査者は、他者に打ち明けていない事柄の内容を示すもの全てを選択するよう求められた。ここで用いられた選択肢は茨木・余語（2002）の研究において、被調査者に筆記可能な範囲で秘密の内容を記述させたものをまとめたものであり、「自分の将来について」、「現在の自分について（性格・外見・能力など）」、「恋愛・異性関係」、「学業生活」、「友人関係」、「過去に受けたいじめ」、「クラブ活動・サークル」、「性に関する問題」、「アルバイト（高校生・大学生のみ）」、「宗教」、「死」、「心身健康問題（体の病気・精神的苦痛・食生活の乱れなど）」、「家族問題（両親の不和・家庭内暴力など）」、「不正行為（盗みなどの犯罪行為・自分がついた嘘など）」、「その他」の15の選択肢（中学生に実施した質問紙にはアルバイトを除く14の選択肢）が設けられた（表2）。

続いて、被調査者は選択した秘密の内容を他者に話していない理由として当てはまるもの全てを選択するよう求められた。その際、複数の秘密があると回答した被調査者は、まずそれらの中で最も深刻な秘密を一つ選択し、その事柄を他者に打ち明けていない理由として当てはまるものを全て選ぶよう求められた。ここで用いられた選択肢も、秘密の内容を表す選択肢と同様に、茨木・余語（2002）の研究において筆記可能な範囲で自由記述させたものをまとめたものである。選択肢は、「他者に反対される」、「自分の印象が変わる恐れがある」、「他者の信頼を裏切る」など20項目が設けられた（表3）。

手続き 中学生および高校生は、ホームルームの時間に封筒に入れられた調査票を手渡され、本研究の目的、記入内容の匿名性と守秘性について、また調査が任意であることが説明された。調査に協力した被調査者は、調査票を封筒に入れ、1週間以内に所定の回収箱に提出するよう求められた。

大学生は、最大10名の少人数集団形式で、心理学実験室において実施した。被調査者は記入内容の匿名性および守秘性が説明された。

結 果

他者に打ち明けていない事柄があると回答した被調査者は、中学生 98 名のうち 54 名 (55.10%) (男子 18 名, 女子 36 名), 高校生 180 名のうち 121 名 (67.22%) (男子 39 名, 女子 82 名), 大学生 343 名のうち 258 名 (75.22%) (男子 101 名, 女子 157 名) であった。

秘密を保持するという行為や性別に、発達的な特徴が存在するのかどうかを検討するため、中学生・高校生・大学生という 3 つの学校段階と性別の 2 要因について秘密保持率の逆正弦変換値を算出し (表 1), χ^2 分布を使用した分散分析を行った。その結果, 学校段階の主効果 ($\chi^2(2) = 14.18, p < .01$) が見られた。多重比較を行ったところ, 中学生と高校生の間に有意傾向 ($\chi^2(1) = 4.06, p < .10$), 中学生と大学生の間に有意差がみられ ($\chi^2(1) = 14.16, p < .01$), 秘密保持率は中学生よりも高校生の方が高い傾向がみられ, また中学生よりも大学生の方が有意に高かった。高校生と大学生の間には有意差はみられなかった ($\chi^2(1) = 3.05, n.s.$)。また, 性別の主効果 ($\chi^2(1) = 8.66, p < .01$) も見られ, 男性よりも女性の方が秘密保持率が高かった。

秘密を保持していると回答した被調査者には, 他者に打ち明けていない秘密の内容を表すものを全て選択させた。表 2 に示すように, 中学生, 高校生, 大学生と一貫して恋愛・異性関係に関する秘密が最も多く 50% 以上を占め, 特に高校生で顕著に報告された。また, 性格・外見・能力など現在の自分に関する秘密も中学生, 高校生では 50% を越えた。また自分の将来についての秘密

表 1 全体および学校段階における男女別の秘密保持率

	中学 ($N = 98$)	高校 ($N = 180$)	大学 ($N = 343$)	全体 ($N = 621$)
男子	.500	.590	.696	.625
女子	.551	.734	.790	.747

表2 中学生・高校生・大学生が保持する秘密の内容（複数選択）

秘密の内容	中学生 (<i>n</i> = 54)	高校生 (<i>n</i> = 121)	大学生 (<i>n</i> = 258)
自分の将来について	21 (38.89%)	45 (37.19%)	86 (33.33%)
現在の自分について(性格・外見・能力など)	27 (50.00%)	70 (57.85%)	118 (45.74%)
恋愛・異性関係	30 (55.56%)	82 (67.77%)	132 (51.16%)
学業生活	7 (12.96%)	27 (22.31%)	35 (13.57%)
友人関係	23 (42.59%)	42 (34.71%)	63 (24.42%)
過去に受けたいじめ	9 (16.67%)	12 (9.92%)	27 (10.47%)
クラブ活動・サークル活動	8 (14.81%)	17 (14.05%)	27 (10.47%)
性に関する問題	7 (12.96%)	21 (17.36%)	44 (17.05%)
アルバイト	—	10 (8.26%)	15 (5.81%)
宗教	3 (5.56%)	3 (2.48%)	10 (3.88%)
死	1 (1.85%)	9 (7.44%)	26 (10.08%)
心身健康問題	2 (3.70%)	26 (21.49%)	59 (22.87%)
家族問題	6 (11.11%)	15 (12.40%)	42 (16.28%)
不正行為	15 (27.78%)	23 (19.01%)	51 (19.77%)
その他	4 (7.41%)	5 (4.13%)	1 (0.39%)

も共通して比較的多く見られた。中学生において最も少なく、全体の4%未満であった心身健康問題に関する秘密は、高校生および大学生では全体の20%以上が保持しているという結果も見られた。

また、秘密の内容によって、学校段階による差がみられるのかどうかを検討するために、秘密の内容ごとに学校段階を要因とする χ^2 検定を行った。恋愛・異性関係 ($\chi^2(2) = 17.32, p < .01$)、友人関係 ($\chi^2(2) = 8.66, p < .05$)、心身健康問題 ($\chi^2(2) = 8.66, p < .05$) の3項目において有意差がみられるという結果が得られた。それぞれ多重比較を行ったところ、まず恋愛・異性関係については中学生と高校生 ($\chi^2(1) = 6.14, p < .05$)、高校生と大学生 ($\chi^2(1) = 10.76, p < .01$) の間に有意差がみられ、中学生よりも高校生の方が、また大学生よりも高校生の方が有意に恋愛・異性関係に関する秘密を多く保持していた。また中学生と大学生の間には有意差はみられなかった ($\chi^2(1) = .64, n.s.$)。友人関係については、中学生と大学生 ($\chi^2(1) = 16.53, p < .01$)、高校生と大学生 ($\chi^2(1) = 5.87, p < .05$) の間に有意差がみられ、大学生よりも中学生や高校生の方

が友人関係に関する秘密を多く保持していた。中学生と高校生の間には有意差はみられなかった ($\chi^2(1) = 2.70, n.s.$)。心身健康問題に関しては、中学生と高校生 ($\chi^2(1) = 30.14, p < .01$)、中学生と大学生 ($\chi^2(1) = 35.70, p < .01$) の間に有意差がみられ、中学生よりも高校生および大学生の方が心身健康問題に関する秘密を多く保持していた。また、高校生と大学生の間には有意差はみられなかった ($\chi^2(1) = .23, n.s.$)。

次に、秘密にしている事柄を他者に打ち明けていない理由を表すもの全てを選択するよう被調査者は求められた。複数の秘密を保持している被調査者には、その中でも最も深刻な秘密を選択させ、その事柄を他者に打ち明けていない理由を表すもの全てを選択させた。最も深刻な秘密の内容は表2で示された複数選択で見られた結果を全体的に裏付けるものであり、高校生、大学生では

表3 秘密保持者が抱える秘密を他者に打ち明けられない理由（複数選択）

秘密の理由	中学生 (<i>n</i> =54)	高校生 (<i>n</i> =121)	大学生 (<i>n</i> =258)
他者に反対される	9(16.67%)	19(15.70%)	27(10.47%)
自分の印象が変わる恐れがある	21(38.89%)	54(44.63%)	112(43.41%)
他者の信頼を裏切る	7(12.96%)	23(19.01%)	50(19.38%)
他者に理解されない	20(37.04%)	46(38.02%)	79(30.62%)
自分の信用を無くす恐れがある	10(18.52%)	25(20.66%)	58(22.48%)
恥ずかしい	24(44.44%)	54(44.63%)	121(46.90%)
他者に迷惑がかかる	2(3.70%)	18(14.88%)	26(10.07%)
聞き手から良い反応が得られない	17(31.48%)	35(28.93%)	63(24.42%)
その事柄について考えたくない	13(24.07%)	26(21.49%)	69(26.74%)
他者に話しても解決しない	25(46.30%)	56(46.28%)	109(42.25%)
その事柄を話せる人がいない	11(20.37%)	25(20.66%)	43(16.67%)
話すきっかけがない	12(22.22%)	23(19.01%)	55(21.32%)
他者との関係が悪化する恐れがある	9(16.67%)	18(14.88%)	42(16.28%)
自分で理解できていない	4(7.41%)	23(19.01%)	44(17.05%)
他者に自慢していると思われたくない	7(12.96%)	5(4.13%)	10(3.88%)
自分の弱い部分を見せたくない	9(16.67%)	23(19.01%)	67(25.97%)
他者に言うてはいけない	9(16.67%)	18(14.88%)	45(17.44%)
上手く説明できない	20(37.04%)	34(28.10%)	50(19.38%)
以前に秘密を人に打ち明けて失敗している	5(9.26%)	9(7.44%)	9(3.49%)
その他	6(11.11%)	8(6.61%)	2(0.78%)

異性・恋愛関係が最も多く見られた。中学生では自分の将来についての秘密が全体のほぼ20%を占め、最も多く、最も深刻であると報告されていたが、この秘密は高校生および大学生では全体の約9%であった。

また、表3に最も深刻な秘密を他者に打ち明けることができない理由を示した。学校段階に関わらず、秘密にしている理由は、全学校段階において共通して多く報告される、あるいは共通して多く報告されないという特徴がみられた。特に、中学生、高校生および大学生に一貫して、他者に話しても解決しない、恥ずかしい、自分の印象が変わる恐れがあるという3つの理由が多く見られた。また、上手く説明できないという理由は学校段階が上がるに連れて減少した。

考 察

本研究では中学生、高校生、大学生がどのような秘密をどのような理由により保持しているのか、また秘密を保持すること自体に中学生、高校生および大学生の間に発達的な変化が見られるのか、更に性別による変化も見られるのかという点について検討した。

先行研究によると、欧米の多くの秘密に関する研究は、一貫して性的な秘密が最も多く報告されると証明しているが(e.g., Hill et al., 1993; Kelly, 1998; Kelly et al., 2001), 本研究では、中学生、高校生、大学生と3つの異なる学校段階において一貫して恋愛・異性関係に関する秘密が最も多く報告された。また同時に、恋愛・異性関係に関する秘密は高校生および大学生において最も深刻な秘密であると示された。これらの結果は、中学生、高校生、大学生は共通して恋愛や異性関係に最も関与しているが、特に高校生でその深刻さは強いことを示している。先行研究の結果とは異なり、性的な秘密が多く報告されなかった本研究の結果は、まず本調査の対象者年齢が若いことが挙げられるだろう。また、性的な事柄を口にすることにとめらいや恥ずかしいと感じる日本の

文化を考えると、恋愛・異性関係に関する秘密は性的な意味を含んだ秘密である可能性も考えられるであろう。

自分の将来についての秘密は中学生においてのみほぼ 20% を占めており、高校生や大学生では約 9% であった。これは高校生や大学生では希望する進路や就職は比較的明確になりつつあるが、中学生は自分の将来について未だ漠然と模索している段階であると考えられるため、そこに知識不足と不安が伴い深刻と評価されているのかもしれない。

また、大学生よりも中学生や高校生の方が友人関係に関する秘密を多く保持しているという結果の理由としては生活環境が挙げられる。中学生や高校生の主な生活の場は学校であり、その中での人間関係は限定されている。その為、友人関係において問題が生じて、それを秘密にしておかない限り、その関係に亀裂が生じてしまう可能性がある。もしそのような事態に陥ってしまうと学校を中心とした生活そのものが苦痛になる。従って友人関係に関する秘密は必然的に多くなってしまうのではないだろうか。しかし、大学生になると、その生活環境は大学の内外で広がりを持ち、自発的な選択を行える。つまり友人関係において問題が生じた場合、その人間関係を自ら回避し、また異なる人間関係を築き上げることも可能となるため、大学生における友人関係の秘密は中学生や高校生と比較すると少ないのではないだろうか。

また、青年期における友人関係の発達的变化を研究した落合・佐藤（1996）は、中学生に比べて高校生や大学生において「自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方」をしていると報告している。同時に、「みんなと同じようにしようとするつきあい方」や「誰とでも仲良くしていきたいというつきあい方」を年齢が高くなるにつれて行わなくなるとも報告している。これらのことは、大学生よりも中学生・高校生において友人関係に関する秘密が多いという本研究の結果を間接的に裏付ける報告であると言える。

また、中学生よりも高校生や大学生の方が心身健康問題に関する秘密を多く保持していた。彼らにおいては学習課題の広がり、また高校生であれば受験、

大学生であれば就職の準備やアルバイトなど、生活自体の中で直面する課題が必然的に多くなるため、ストレスが増加し、それ故心身健康問題が多くなるのだろう。ストレスと心身健康の負の関連はこれまでの数々の研究において実証されていることである (e.g., Segrin, 1998, 2001; 鈴木・豊田・小杉, 2004)。

本研究において、最も深刻な秘密を他者に打ち明けられない理由として他者に話しても解決しない、恥ずかしい、自分の印象が変わる恐れがあるという3つが一貫して多く報告された。この結果は Hill et al. (1993) の報告とも一致する。青年期では、両親から離れることにより責任感が増大し、それに伴い情緒的・社会的孤独感が生じやすくなると言われている。その為、内面を共有できる友人は孤独感を癒してくれる存在となると報告されている (遠藤, 1997)。また、知覚されたソーシャルサポートと孤独感はある負の相関にあり (e.g., 福岡・橋本, 1992; Sarason, Shearin, Pierce, & Sarason, 1987), 親友関係の形成が孤独感低減において重要であるとも言われている (諸井, 1986)。これらの事実から、本研究から得られた結果は、秘密の内容自体と関連して、相手からの評価懸念や人間関係の希薄さによる孤独感などが関連していると推測される。換言すれば先行研究により指摘されている秘密の開示による人間関係の混乱 (Goffman, 1966) や悪化 (Argyle, et al., 1981) を予測しているのだろう。また、上手く説明できないという理由が学校段階が上がるに連れて減少するのは、自分の考えや感情を適切に表現することが可能になる発達的な変化と考えられる。

一方、別の側面から見れば、秘密を保持することは個人が健康的に成長している証であると考えられているが (e.g., Hoyt, 1978; Szajnberg, 1988), これまでの多くの研究は大学生を対象にして行われていることから、本研究では中学生、高校生および大学生という3つの異なる学校段階において秘密を保持すること自体に発達的な変化が見られるのかどうか、また性別によって変化が見られるのかどうかを検討した。その結果秘密保持率は中学生よりも高校生の方が高い傾向がみられ、また中学生よりも大学生の方が有意に高く、高校生と大学

生の間では差はみられなかった。また男子よりも女子の方が有意に高かった。これらのことは、中学生までは秘密を保持することはあまり頻繁に行われていないが、高校生になるとその頻度は増加する傾向にあることを示し、大学生では高校生との間に差はないことを示している。性別という観点から見ると、全学校段階において女子の方が男子よりも秘密を保持する頻度は高い。このことは女性は男性より一般的に人間関係に敏感であるというこれまでの多くの研究と符号する (e.g., Gore, Aseltine, & Colten, 1993; Pease & Pease, 1999; 和田, 1998)。つまり、秘密を保持するということは、良好な人間関係を維持するために必要な社会的スキルであることが考えられ、本研究の結果から、そのスキルは中学生から高校生を境に備わるものであり、またそれは男子よりも女子において効果的に使われやすいスキルであると考えられる。

本研究においては秘密の内容を一切限定せずに調査したところ、他者を含まない被調査者自身に関する秘密が多いことが考えられた。また、秘密は安定した人間関係を維持するために必要な社会的スキルであり、それは中学生と高校生を境に確立される傾向を持つものであると思われた。そしてこのスキルは日々の生活の中では、男子より女子の方が多く使用していることが明らかになった。総合的に考えると、秘密の保持は中学生では孤独感と関連性を持つが、年齢の増加とともに安定した人間関係を維持する上で必要なスキルとなるという二つの側面を持つ可能性が示唆された。今後は、秘密の保持を更に詳しく調べるために被調査者自身に関する秘密、あるいは被調査者が他者から聞いた秘密というように内容を区別し、その発達の段階や性別による変化を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Argyle, M., Furnham, A., & Graham, J. A. 1981 *Social Situations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Argyle, M., Henderson, M., & Furnham, A. 1985 The rules of social relationships. *British Journal of Social Psychology*, **24**, 125-139.

- Baxter, L. A., & Wilmot, W. W. 1985 Taboo topics in close relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **2**, 253–269.
- Brislin, R. & Pederson, P. 1976 Cross-Cultural Orientation Programs. New York : Gardner Press. Pp 10.
- Cole, S. W., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Visscher, B. R. 1996 Elevated physical health risks among gay men who conceal their homosexual identity. *Health Psychology*, **15**, 243–251.
- DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. 1996 Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 979–995.
- 遠藤公久 1997 II 交友関係（第7章 人間関係の変化）加藤隆勝・高木秀明（編）青年心理学概論 誠心書房 Pp. 110–123.
- Finkenauer, C., & Rime, B. 1998a Socially shared emotional experiences vs. emotional experiences kept secret : Differential characteristics and consequences. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **17**, 295–318.
- Finkenauer, C., & Rime, B. 1998b Keeping emotional memories secret : Health and subjective well-being when emotions are not shared. *Journal of Health Psychology*, **3**, 47–58.
- 福岡欣治・橋本 宰 1992 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャルサポートの測定 健康心理学研究, **5**, 32–39. (Fukuoka Y., & Hashimoto, T. 1992 Measurement of perceived availability of social support based on specific relationships. *Japanese Health Psychology*, **5**, 32–39.)
- Goffman, E. 1966 *Behaviour in Public Places*. London : Collier-Macmillan.
- Gore, S., Aseltine, R. H. Jr., & Colten, M. E. 1993 Gender, social-relational involvement, and depression. *Journal of Research on Adolescence*, **3**, 101–125.
- Gross, J. J. 1998 Antecedent and response focused emotion regulation : Divergent consequences for experiences, expression, and physiology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 224–237.
- Hill, C. E., Thompson, B. J., Cogar, M. C., & Denman, D. W. 1993 Beneath the surface of long-term therapy : Therapist and client report of their own and each other's covert processes. *Journal of Counseling Psychology*, **40**, 278–287.
- Hoyt, M. F. 1978 Secrets in psychotherapy : Theoretical and practical considerations. *International Review of Psycho-Analysis*, **5**, 231–241.
- 茨木友子・余語真夫・橋本 宰 2004 大学生におけるネガティブな秘密の保持とパーソナリティおよび精神的健康の検討 同志社心理, **51**, 10–16. (Ibaraki, T., Yogo, M., & Hashimoto, T. 2004 Keeping Negative Secrets : Relations with Personality and Mental Health. *Doshisha Psychological Review*, **51**, 10–16.)

- 茨木友子・余語真夫 2002 秘密と健康 日本健康心理学会第15回大会発表論文集, 314-315.
- Kelly, A. E. 1998 Client's secret keeping in outpatient therapy. *Journal of Counseling Psychology*, **45**, 50-57.
- Kelly, A. E., Klusas, J. A. von Weiss, R. T., & Kenny, C. 2001 What is it about revealing secrets that is beneficial? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 651-665.
- Larson, D. G., & Chastain, R. L. 1990 Self-concealment: Conceptualization, measurement, and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 439-455.
- Lehman, D. R., Wortman, C. B., & Williams, A. F. 1987 Long-term effects of losing a spouse or child in a motor vehicle crash. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 218-231.
- Margolis, G. J. 1966 Secrecy and identity. *International Journal of Psycho-Analysis*, **47**, 517-522.
- Margolis, G. J. 1974 The psychology of keeping secrets. *International Review of Psycho-Analysis*, **1**, 291-296.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, **25**, 115-125. (Moroi, K. 1986 Loneliness induced by situational changes in the lives of freshmen. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **25**, 115-125.)
- Morsbach, H. 1977 The psychological importance of ritualized gift exchange in modern Japan. *Annals of the New York Academy of Science*, **293**, 98-113.
- Norton, R., Feldman, C., & Tafoya, D. 1974 Risk parameters across types of secrets. *Journal of Counseling Psychology*, **21**, 450-454.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65. (Ochiai, Y., & Satoh, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- Pease, A. & Pease, B. 1999 Why men don't listen and women can't read maps. Mona Vale, N. S. W., AU: Pease Training International.
- Pennebaker, J. W. 1993 Mechanisms of social constraint. In D. Wegner & J. W. Pennebaker (Eds.), *Handbook of mental control*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. Pp. 200-212.
- Pennebaker, J. W., Barger, S. D., & Tiebout, J. 1989 Disclosure of traumas and health among holocaust survivors. *Psychosomatic Medicine*, **51**, 577-589.
- Peskin, J. 1992 Ruse and representation: On children's ability to conceal information.

- Developmental Psychology*, **28**, 84–89.
- Sarason, B. R., Shearin, E. N., Pierce, G. R., & Sarason, I. G. 1987 Interrelations of social support measures : Theoretical and practical implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 813–832.
- Segrin, C. 1998 Disrupted interpersonal relationships and mental health problems. In B. H. Spitzberg & W. R. Cupach (Eds.), *The dark side of close relationships*. Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 169–196.
- Segrin, C. 2001 *Interpersonal processes in psychological problems*. New York : The Guildford Press.
- 鈴木綾子・豊田秀樹・小杉正太郎 2004 項目反応モデルによるストレス反応尺度の構成とテスト特性曲線によるその深化の過程 心理学研究, **75**, 389–396. (Suzuki, A., Toyoda, H., & Kosugi, S. 2004 Construction of a stress reaction scale based on item response model and examination of the developmental process of psychological stress reactions by using test characteristic curves. *The Japanese Journal of Psychology*, **75**, 389–396.)
- Szajnberg, N. 1988 The developmental continuum from secrecy to privacy in a psychodynamic milieu. *Residential Treatment for Children and Youth*, **6**, 9–28.
- 和田 実 1998 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康の関連一性差の検討 実験社会心理学研究, **38**, 193–201. (Wada, M. 1998 Undergraduates' Coping with Stress, and the Relationships among Stress, Social Support, and Psychological Well-beings : As Examination of Sex Differences. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 193–201.)
- Wortman, C. B., & Lehman, D. R. 1985 Reactions to victims of life crises : Support attempts that fail. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (Eds.), *Social support : Theory, research, and applications*. Dordrecht, The Netherlands : Martinus Nijhoff. Pp. 463–489.

謝辞

本研究にご協力下さいました同志社国際中学校・高等学校の先生方, ならびに生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。